

本願文 第 14 願 2025/10/24gotonote

願名 声聞無数の願

願文 設我得仏 國中声聞、有能計量 下至三千大千世界 声聞縁覚、於百千劫、悉共計校知其数者 不取正覚。(真聖 P17)

梵本 (14) もしも、世尊よ、わたくしが無上なる正等覚をさとしたときに、かの仏国土において、たとえ三千大千〔世界〕に属するすべての生ける者たちが、独覚となって十万・百万・千万劫の間数えるとしても、或る生ける者が声聞(弟子)たちの数を知るようであるならば、その間は、わたくしは無上なる正等覚をさとりません。

現代語訳 もし、わたしが仏になれるとしても、わたしの国の声聞の数に限りがあつて、すくなくとも三千大千世界のすべての声聞(仏の教えを聞く人)や縁覚(独りで目覚めようとする人)が、長い時間をついやして、それらの人々が力を合わせて計算して、その数を知ることができようなら、わたしは誓ってさとりを開きません。(尾畑 P57)

成就文 彼仏初会声聞衆数、不可称計。(真聖 P32)

<語注>

「声聞」 梵語 *śrāvaka* の訳。声を聞く者の意で、仏陀の教えを聞いてさとる者をいう。もとは仏在世の頃の仏弟子を指したが、仏滅後の部派仏教の時代には阿羅漢のさとりを目指して修行する者の意となり、大乘仏教興起以後は、縁覚とともに二乗自利の個人解脱を求めるものとして、衆生の救済を先とする菩薩大乘の自利利他円満の道と区別される。(松原 P193)

「縁覚」 梵語 *pratyeka-buddha* の訳。各自に覚った者の意で、独覚とも訳し、とも音写される。仏のおしえによらないで自ら道をさとり、寂靜な孤独を愛して説法教化をしない聖者である。(松原 P193)

<視点>

・「阿弥陀仏に無量無辺の声聞弟子あり」

また舍利弗、かの仏に無量無辺の声聞弟子あり、みな阿羅漢なり。これ算数の能く知るところにあらず。(『阿弥陀経』 真聖 P128)

・「光明のはたらきは、すべての存在を諸仏として見いだす」

光明無量ということは、そこに一切の存在を仏弟子として見いだすことである。そのことが声聞無数と。この場合に声聞というのは文字通り教えを学ぶものですね。ですから、この 14 願は国中人天でなくて國中声聞となっておりますね。(宮城大経 24P100)

・「法蔵菩薩の本願力、第 14 願に声聞衆多が誓われている」(宮城大経 25P7)

法蔵菩薩の本願力および龍樹菩薩の所讃を尋めるに、みな彼の国に声聞衆多なるをもって奇とするに似たり、これ何の義あるや。」

・「声聞という存在の在り方は、不生、何も生み出さない」(〃 P8)

声聞は実際をもって証とす。計るに更によく仏道の根芽を生ずべからず。

・「仏よく声聞をして無上道心を生ぜしむ」(真仏土一大義門功德成就— 真聖 P315)

かくのごとき生ずべからずして生ぜしむ。所以に奇とすべし。しかるに五不思議のなかに、仏法最も不可思議なり。仏よく声聞をしてまた無上道心を生ぜしむ。まことに不可思議の至りなり。

・「聞法というかたちで仏道を覆い隠す」

その意味ではじめてここの第 14 願は煩惱の身の事実にとつて聞法せしめられる。そういう存在として生み出される。三悪趣の存在を声聞として生み出す、仏者として生み出す。仏者としての第一のすがたが声聞です。かならずそういう姿を取らざるをえない。しかし同時に声聞という在り方はもっとも危ない在り方です。聞法に腰を下ろすということがつねにあるわけです。自らの聞法に腰を下ろしたときには、聞法というかたちで仏道を覆い隠すという問題を持つのでしょうか。それこそ仏法を破る者は仏法者なんです。(宮城大経 25P18)